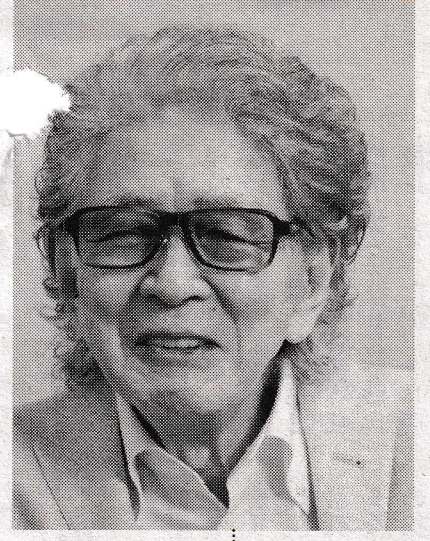
コロナ禍の時代 おれたちはどう生きるか

五木寛之

「無用の人から救う」という決断もあるのでは

コロナ禍の時代をどう生きるか。作家・五木寛之(87)と政治学者・姜尚中(70)が語り合った。朝鮮半島からの引き揚げ者として、在日コリアン2世として、ままならぬ道を切り開いてきた二人。未曽有の世相の闇に目を凝らし、見えてきたものは?



五木　不思議で仕方がないんですけど、新型コロナウイルスの蔓延(まんえん)がどうしてこれだけ大きな影響を及ぼしているんだろうか。そこがどうもわからないんですよ。というのは、スペイン風邪と言われている1918年ごろの流行ですけど、日本国内の死者だけで39万ぐらいから42万ぐらいという説があります。コロナの人的被害と比べたら比較にならないくらいの差があるわけですね。にもかかわらず、なぜコロナでこれほどの社会的影響が世界的に起こっているのか。

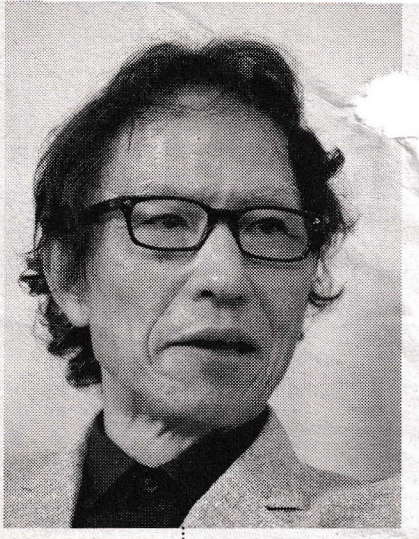
姜　たしかに五木さんの少年時代、死と生が同居しているような状況だった第2次世界大戦中でさえ、映画館や劇場、寄席という今で言うエンタメを、人々が楽しめなくなることはほぼなかったでしょう。それなのに、コロナ禍では「ロックダウン」という聞いたことのないような現象が起きました。それもアジアや欧米、遠いアフリカまで同じコロナが暗い影を落としています。

五木　コロナ禍の中に何か謎があるような気がするんだよね。大きなパラダイムの大変換。そういうものが引き起こされる理由はなんだろうと、考え続けているんです。

格差の問題があらわになりましたね。「ステイホーム」と言われてもうちにいられないエッセンシャル・ワーカーがいっぱいいるじゃないですか。そういうところに感染が広がり、かたや郊外へ優雅に逃避できるような人たちは逃れられるというような。変な話だけど、国会議員で陽性という話はあまり聞いたことがない。丈夫だとかそういう問題だけじゃなくて、何かあるんじゃないかという気がして仕方ないんだけど。

いつき・ひろゆき　1932年、福岡県生まれ。生後まもなく朝鮮半島にわたり、47年引き揚げ。66年『さらばモスクワ愚連隊』でデビュー。『蒼ざめた馬を見よ』で直木賞、『青春の門』『戒厳令の夜』『風の王国』『親鸞』『大河の一滴』など。

週刊朝日



絆からディスタンスへ 乾いた関係に疲弊する

姜尚中

姜　このままではワクチンがもし万能でなくても、少し効きそうだと言った時にね、格差社会のこれまでオブラートに包まれていた、ある種のヒューマニズムみたいなものが剝がされることが起きかねないですね。

五木　ワクチンにしても安価で大量にそれができればいいんですけど、がんの特効薬みたいにえらく高価なものが出てきたりしかねない。国民的意識が強くなり、どこかで国家の強権を望むようになってきた。こういう時は政治がもっとはっきり決断して欲しい、という意識。そうした翼賛的な意識が出ているのが気がかりです。GoToキャンペーンにしても、動けというのか、じっとしておれというのかはっきりしてくれと。この「お上がはっきりしてくれ」という民意が、すごく危険な気がします。

姜　格差が見えてきたからこそ翼賛という一つの想像上の共同体ができないとまとまらない、ということですね。日本国民は皆同じ、という一つの虚構が必要なわけです。ただ実際は中小零細の飲食関係、劇場であれば美術や音響照明、といったあまり目立たない仕事をしている人の悲鳴が方々から聞こえてきます。

見えない感染症 非常に不安呼ぶ

五木　僕は平壌（ピョンヤン）で終戦を迎え、命からがら38度線を越えて難民収容所のようなところに収容されました。そこで発疹チフスのクラスターが起きたんですが、その時は、感染させるものが見えた。シラミです。だから、肌着からシラミを取ってプチプチと爪でつぶしていって、こいつがうつすのかというのが確認できた。ペストはネズミからくるノミですよね。これも感染させるものが見える。

　ところが、コロナウイルスは見えない。見えないものが襲ってくるという不安感というのが生理的物理的なものを超えて、人間に大きな影響を与えているような感じがするんですが。

姜　僕自身も勤め先の九州や講演などで各地と行き来しているうちに、ふと罹患（りかん）したんじゃないか、と不安にかられました。前にお世話になった病院に頼んでPCR検査を受けたんです。

　それと最近ショッキングだったのは、海外の世論調査なのでどこまで正しいのかわからないところもありますが、日本の場合は、特に罹患した人に責任がある、と受け止められる傾向があるそうですね。

五木　病気そのものよりは、陽性反応を起こした存在になることへの恐怖かな。あの銀行に陽性者が出ている、というと、そこの銀行は石が投げられたりする。会社の命運にかけても感染できないと考える人がいるんだよね。PCR検査を受けないと陽性か陰性かはっきりしない。そのへんの不安感が問題です。結果、人間と人間の関係の中でディスタンスというのが強く要求されるわけですから。

　東日本大震災が発生したあと「絆」という言葉がすごく使われました。人間の絆を回復しようと、ついこないだまで言われていた。それが今度は「絆を切れ」と言われているわけだから。ダイレクトな人間と人間の接触を切っていくという方向にポストコロナは進む、と気の早い人は言っていますけど。

姜　たしかに東日本大震災の時も

カン・サンジュン　1950年、熊本県生まれ。東京大学名誉教授で、専門は政治学・政治思想史。熊本県立劇場館長。現代人の生き方のヒントを探る『悩む力』のほか、『在日』『母の教え　10年後の「悩む力」』など。

絆という言葉が合唱されるように使われ、ボランティアも含めて、問題はあっても、いろんなことを乗り切ってきた面はありましたね。

今回は、絆を断ち切って自分で自分のことはケアしましょうと。だから正直言って、他人がどうなろうと構わない、という非常にパサパサとしたところがある。そこで、また疲れてしまうということがあるんじゃないでしょうかね。

こないだ僕の親戚で亡くなった人も、結局葬式もあげられませんでした。身内も結局、火葬場に行けない。東日本大震災の時はいい意味でも悪い意味でもセンチメンタリズムというか、何かこう物語性の余地はまだあったんですが、コロナというのは本当にね……。

五木　人間の絆を切断する方向へ進んでいる。

姜　そこをしっかり見据えたうえで、どこまで「吹っ切って」コロナと向き合っていけるか。耐え方を楽しみながら耐える、ということにまで変えられるかどうかですね。耐える、と言うとなんか謹厳実直でちょっとストイックなイメージになりがちですけど。耐えることは楽しいという、ある意味ではマゾヒスティックなところまで行かないと、この事態を受け入れられないかなと思います。耐えることすなわち喜び楽しみ、そういう風なイメージですかね。

かつては戦争が景気のカンフル剤になり、現代はイベントで景気浮揚させようとしてきましたが、これからはそうもいかないでしょう。

五木　東京五輪は無理だと誰もが感じている。

姜　オリンピックは難しいでしょうね。アフリカや中南米で猖獗（しょうけつ）を極めているこの状況が来年変わるとも思えません。

安倍首相は五輪招致演説で、福島第一原発の汚染水について「アンダーコントロール（管理下にある）」と述べて、それが招致実現へと繋がったわけです。

でも今回のコロナ禍は、いろいろな希望になるようなものを示そうと、どんなに政治家たちが策を弄（ろう）してもね、うまくいかないんじゃないか。だから落ちるところまである程度落ちてしまうでしょう。五木さんの言われるパラダイムチェンジが起きて、社会の枠組みががらりと変わる可能性は大いにありますね。

コスパ高の人救う それでいいのか？

五木　コロナ禍で突きつけられた医療現場の選択で、重篤で先の短い90歳の患者さんと、将来のある若い人とどちらを救うかという局面があるでしょう。年寄りのほうに人工呼吸器をつけるべきだというのが仏教の考え方です。

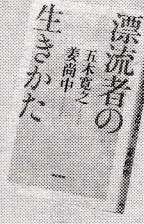
でも、いまは若い人を救う、という風にマニュアル化されている。つまり〝コスパの高い〟人を救うということが。でもそれでいいのか、と迷ってもいい。僕は一番症状のひどい人を救う、一番つらい人を救うべきだと思いますけど。そういう局面で、人の将来の生産需要など計算しちゃいけない。

僕のような年を取った高齢者の立場でそんなことを言うと、自分たちの階層を保護するような形になるんですよ。若い青年の間から、「弱いものを救うべきだ」という、そういう意見が出ても本当はいい、と思うんですけどね。

姜　恐らくそこが決壊すると、優生思想になってしまう。これは偶然でしょうけど、京都でALS患者の〝安楽死〟事件が起きましたよね。少し前には神奈川県相模原市の障害者施設で事件が起きました。まずは弱者、困っている人を優先しなきゃいけない。でも実際は、効率性や生産性で測られるコスト重視論が広がっています。

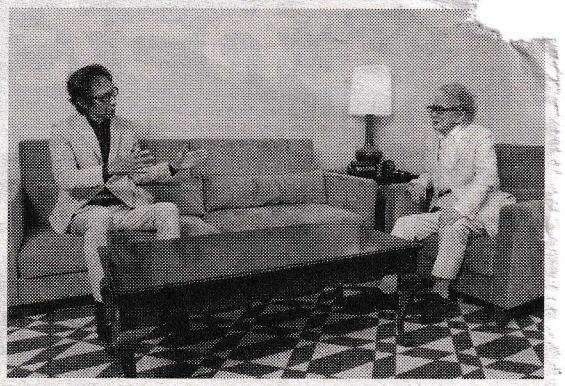
五木　例えば政治家がこうすればいい、と言った時に、宗教の立場からはいやそうじゃない、〝ダメ

「これが日常だ」そう思い生き抜く（五木）



五木寛之さんと姜尚中さんの初めての対話集『漂流者の生きかた』（東京書籍、税別1300円）が、好評発売中。週刊朝日誌上などで語り合った10年にわたる記録。

★サイン本プレゼント　この本を3人にプレゼントします。住所、氏名、年齢、電話番号をご記入のうえ、本ページ右下の応募券を貼り、はがきでご応募を。当選者の発表は、発送をもってかえさせていただきます。あて先は〒104－8011　東京都中央区築地5－3－2　週刊朝日「五木寛之×姜尚中対談サイン本プレゼント」係　締め切りは9月14日（月）必着


撮影・戸澤裕司

な人〟を救え、と。そんな声があってもいいはずなんですけどね。しかし、どの宗教からもそんな声は聞こえてきません。

愛という言葉が聞こえてこない

五木　コロナ禍の現在、「愛」という言葉がほとんど聞こえてきませんね。そもそも僕なんか愛なんて聞くと、むずがゆくなってきてアレルギー起こしそうなたちなんだけど、いまは違います。こんな時こそ、どこかから愛という言葉を実感させてほしい。弱い人間と強い人間と2人いて、どっちに人工呼吸器をつけるかといった時には、そこで迷って迷って、弱い立場の人につける、という考えもあるんじゃないか、と。

姜　人類史の中で延々と積み重ねられてきた愛とか共感とか、なんかそういう言葉がだんだん死語化するようなね。そういうイメージで、コロナの時代を迎えています。人間存在の共同性みたいなものが根本から崩れていますね。だからこそ、この状態をどこまで受け入れて、耐える中で、やっぱり共感や喜びを見いだすような考えが広がらないといけない。

でもね、思春期の若い人たちはこの状況をどう受け止めて大人になっていくんだろうかなあ、と思うと、胸が痛い感じがします。愛という言葉は、いちばん陳腐でいちばん希少な言葉になっているのかもしれません。

五木　愛する人が陽性か陰性かわからない時にキスできるか。その時には証明書なんか見せ合ったりするんですかね。互いに疑心暗鬼になって、2メートルも距離を取る。でもそれが日常になった時には、恋愛はどういうものになるんでしょうね（笑）。

今を受け入れ耐えること 楽しみに（姜）

姜　そうした変容を受け入れて、それを英語で言えばカスタマイズして、だんだん自分が吹っ切れてどこまで自分流のものにしていけるか。これはまたこれで、非常にスリリングな時代に応じた姿勢なのかもしれません。

政治を学んだ者としてはね、この200年、日本が目標とし、世界のトップランナーであったイギリスやヨーロッパ、アメリカがね、こんなに低迷しているということはなかったんじゃないかなと考えています。

五木　僕は最近、情報というものに対して非常に強い不信感を抱いています。今日は何人って東京都が発表するじゃないですか。あれも手加減してやっているんじゃないかと多くの人が思っていますよね。しかも専門家に言わせると、PCRも抗体検査も誤差が結構あると。何を信用していいのかわからない、という不安が大きく広がっている。

姜　翼賛的な空気の中で指示待ちの人が多くなり、これでやれって言われればもうそれに従うみたいな流れが強いです。だから自分の道は自分である程度決めたいんだけど、そこにはなかなか踏み込めない。そんな迷いが生じるのもコロナがもたらした世相ですよね。

五木　世の中というものは矛盾だらけなので、一つ一つそれをクリアしていくしか道はないと思います。コロナ禍の根の深さを考えると、台風一過というようなことはないでしょう。こういう風にやったから変わる、というものではありません。ポストとかアフターとか考えずに「これが日常だ」と思って生きるしかない。人生ってこういうものなんだ、と。ですから、とにかくその中で生き抜くという単純なことしかない、と思います。

姜　それに近いかもしれないですが、やっぱり耐えることが楽しみになるような、そういう生き方をしてみようかなと。この8月で70歳になり、古希の年代を迎えましたしね。耐えることは苦しみではなくて、それが楽しみになるような生き方ができれば、と繰り返し自分に言い聞かせています（笑）。

構成　本誌・木元健二